

個性ドラゴンの魔法少年 アカデミア

プリミティブドラゴン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーローを目指す無個性の少年緑谷出久は幼い頃から爆豪に10年間虐められオールマイトからは夢を否定された。そして情け無いヒーローのせいで火事により母を失った出久は飛び降り自殺した…だが遅れ咲の個性が発現した！そして謎の白い生き物キュウベえと出会った出久は再びヒーローを目指すのだった

この話は僕の魔法少女アカデミアのリメイク版です！出久が少女ではなく少年のままで個性もあります!!？

この作品は爆豪とオールマイトアンチです。

キュウベえは騙したりしない綺麗なキュウベえです。魔女は存在しませんしグリー

フシードもないので出久が魔女化する事はないのでご安心を!!?

タグに入らなかった物

出久、心操ヒーロー科へ、爆豪敵落ち

目次

原作開始編

一話遅れ咲の個性が発現した少年は魔

法少年となる

1

第2話ヴィジランテ名ドラゴンウイ

ザード

5

第3話ドラゴンウイザードVS血狂い

マスキュラー

9

雄英入試く入学編

第4話雄英入試試験

15

第5話雄英実技試験開始!!?

19

第6話雄英入学!そしてもう1人の幼

馴染

25

第7話特別参加!?!? 戦闘訓練!?!?

29

第8話「力の差を思い知らせてやるよ」

出久対爆豪!?!?

33

第9話出久& a m p ;心操ヒーロー科

へ/爆豪の末路

43

第10話委員長決めとマスコミ騒動

47

USJ襲撃事件編

第11話悪意襲来

52

第12話出久VS敵連合

61

第13話死闘!出久対脳無!?!?

66

雄英体育祭編

第13・5話	狐化した出久の日常。そして…	72
第14話	雄英体育祭前	78
第15話	雄英体育祭開幕！	83
第16話	障害物競走開始!!?	87
第17話	狙われまくりの騎馬戦！音速のモンスター登場	91
第18話	オリエンテーション	97

原作開始編

一話遅れ咲の個性が発現した少年は魔法少年となる

人口の約7割が「個性」という特殊体質を持つこの世界。僕緑谷出久は人口の数割の中にいる「無個性」の一人で個性を持たずに産まれてきたんだ。だけど無個性でもヒーローになれるように身体を鍛えていたんだけど幼馴染、いやもう幼馴染じゃないか爆豪君は僕が「無個性」だと分かると虐めてきたんだ。四歳の頃から始まり現在中学生の15歳。約10年間も虐められてきたんだ。もう1人の幼馴染杏子ちゃんだけは僕の味方だった

そんなある日憧れのオールマイイトに「無個性でもヒーローになれますか？」と聞いたんだでも返ってきた言葉は「夢を見る事はいい事だ。でも、現実を受け入れないとな」と否定の言葉だった。

「でも大丈夫。無個性でもヒーローになれるように頑張ろう！」

僕は無理矢理明るく振る舞い家に帰ったが

「嘘……だろ？なんで!!？」

僕の家が”火事”になっていたのだった

「火事だぞ!!？」

「早く消火を！」

「ヒーローはまだなのか!!？」

目撃した人が必死に消火活動をしていた

「どうしたんですか!!？」

「ヒーローが来てくれたぞ!!？」

遅れてヒーローが到着したが

「だ、だめだ！火の勢いが強くて中に入れない!!？」

「俺は消火で精一杯だ！」

「俺じゃ無理だ」

「オールマイトがいれば……」

「なんだよ……これ……」

ヒーロー達は押し付けあつて助けようとはしなかった。暫くして炎は鎮火したが

「どうしてだよ……母さん!!？」

僕の母は焼け死んでしまった

ヒーロー達はインタビューに答えていたが

「到着していた時は間に合わなかった」

と言っていたのだ。

僕は黙ってその場を走り去りオールマイトと話したビルの屋上まで来ていた

「もう限界だ…今行くよ母さん。ごめんね杏子ちゃん」

僕はビルから飛び降りた

ガン！

ドサ

「あ、あれ…？生きてるのか」

飛び降りた筈の僕は無傷だった

「ん？こ、これはドラゴンの爪？」

何故か手の爪がドラゴンの爪になっていた

「ははは。なんだよ個性があるじゃないか！もうヒーローも誰も信じない！この世界は

偽善者だらけだ！俺が世の中を変えてやる!!？」

「ちよつといい？」

目の前に不思議な生き物がいた

「君は誰だ？」

「初めまして僕はキュウベえ！君にお願いがあるんだ」

「お願い？」

「僕と契約して魔法少年になってよ!!？」

「魔法少年？」

「君からは魔力を感じるからね。僕には分かるんだ！」

「成る程ね。分かったよ…なってやるよ魔法少年にな」

「よろしくね！」

俺はキュウベえと契約して魔法少年となった。

「俺はこの力でヒーローになる。母さん見守ってくれ」

不思議な白い生き物キュウベえと出会った少年は再びヒーローを目指す

第2話ヴィジランテ名ドラゴンウィザード

俺の名は緑谷出久個性ドラゴンが発現しキュウベえと出会った事により魔法の能力を手に入れた。俺はヴィランと手を組んでいるヒーローや金や名声目的の偽物ヒーローを倒す日々を送っている…。助けた人達は「君が真のヒーローだ」と言ってくれているが他のヒーロー達からは「ヴィジランテ」「ドラゴンウィザード」と呼ばれている。俺はそんな名前で呼ばれても偽物ヒーローを倒し続けていた

「観念するんだな偽物」

「な、何でヴィジランテのドラゴンウィザードが俺を攻撃するんだよ!!?」

「お前は金目的でヴィランと手を組んでヴィランに破壊活動をさせていた。そして大勢の人達が死んだんだ…お前は駆けつけてヴィランを捕まえて称賛されていたんだ。そんな奴がヒーローを名乗るんじゃないやねえ!!? はああああ!!?」

出久は戦闘モード（リオレウス）に変身し火炎攻撃をした

ドガアアアアアア!!?

ドガアアアアアア!!?

「くそっ!!? こうなったら…出てこいお前らああ!!?」

ヒーローはヴィラン達を呼んだ

「こいつだな」

「ヘッヘッへ」

「殺しがいがあるぜ」

「チツ！仲間を呼びやがったな…だがな」

カチッ

ドガ！バキ！ドゴオ！

カチッ

ドササササ

「な！！？」

「俺には無意味なんだよ」

時間停止でヒーローが呼んだヴィラン達は全て気絶させられた

「終わりだ！！？」

バキイ！！？

「ガハア！！？」

ドサ

ヴィランと手を組んでいたヒーローは出久のストレートで気絶した

「私が来たア!!?」

「今度はオールマイトかよ」

オールマイトNo. 1ヒーローだが俺が最も嫌いな奴だ

「なっ!!?これは君がやったのか!!?」

「此奴はヴィランと手を組んでいた偽ヒーローだからな」

俺はオールマイトに見向きもせず立ち去ろうとしたが

「待ってくれ!まさか君は…」

「今更気づいたのかよ偽善者」

「まさかあの時の少年!!?」

「そうだよお前のせいで俺はヒーローを憎んでいるんだ」

「あの時は悪かった!!?」

「今更遅いんだよ!!?でも感謝するぜ」

「か、感謝?」

「お前の”現実を見る”で絶望した俺は飛び降りて一度死んだ」

「な!!?」

「でもおかげで遅れ咲の個性が発現したんだよ。礼を言うぜ」

「や、やめてくれ」

「ハツハツハツ！血い見せろおおおおおお！！？」

出久が駆けつけると筋肉質の男が暴れ回っていた

「ヒーローはどうしたんだ？」

「出久！あそこにいるよ！！？」

キユウベえが言った場所に倒れているヒーローがいた

「あれって火災等で活躍しているウォーターホースか！」大丈夫ですか！！？」

「子供！！？き、君は逃げて！」

「私達の事はいいから」

「（どうやらこの2人は夫婦でヒーローしているみたいだね）」

「その怪我で何を言ってるんですか！」

「私達なら大丈夫だ。あのヴィランは倒してみせる」

「まだ生きていたのかよ…お前らの攻撃で俺の右目を失った恨みをさせてもらうぜ！！」

「？」

男は倒れているウオーターホース夫妻に襲いかかってきた

「出久来たよ!!?」

「今離れたらこの人達が危ない!やるしかないか」

出久は戦闘モード(リオレウス)に変身した

「き、君はまさか!」

「貴方が噂になっっているヴィジランテドラゴンウィザードだったの?」

「怪我を治すので回復したら離れて下さいね」

出久は回復魔法でウオーターホース夫妻の怪我を回復した

「助かったよ。そいつは血狂いマスキュラー!個性は筋肉増強。筋肉を増強して攻守共に厄介なヴィランだ」

「私達は避難してない人を探しに離れるけど無理はしないでね!」

「情報ありがとうございます。早く離れて」

ウオーターホース夫妻は出久に回復して貰った後マスキュラーの情報を話して一時的にその場を離れた

「さて、血狂いマスキュラー。俺が相手だ!!?」

「てめえはヴィジランテのドラゴンウィザードか?血い見せろおおおお!!?」

マスキュラーは筋肉増強した腕で出久に殴りかかった
ドガアアアアアン!!?

「ぐっ!!? 流石にきついな」

出久は咄嗟にガードしたがダメージを少しだけ受けた
「今度はこつちの番だ! はああああ!!?」

出久は翼を展開して飛び上がり爪攻撃をした

「やるなお前! だが俺の筋肉増強には勝てねえだろ!!?」
「やってみなきや分かんねえだろうがああああ!!?」

出久とマスキュラーは激しい戦闘をしていた

「まだまだああああ!!?」

出久は大量の銃を召喚した

「狙い撃つ!!?」

ドガガガガガガガアアアアアアアアン!!?

「ぐああああ!!?」

「(どうやらマスキュラーは限界みたいだね)」

「ああ! これで終わらせる!!?」

出久はドラゴンモード(ライゼクス)に変身した

「(雷鳴衝撃波!!?)」

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ!!?

雷を纏った衝撃波をマスキュラーに放った

「ギャアアアアアアアアアアア!!?」

ドサ

マスキュラーは気絶した。マスキュラーが気絶したのを確認した後出久は変身を解いた

「はあ、はあ…ぐ!!?」

「(い、出久大丈夫?)」

「(腕が折れているが治癒すれば大丈夫だ)」

マスキュラーとの激しい戦闘により出久の腕は折れていたが治癒魔法で治癒したの
で問題なかった。そしてマスキュラーを簀巻きにして身動きができないようにした

「大丈夫か君!!?」

「怪我はしてない!!?」

「(ウオーターホースが来たみたいだよ)」

「(助けられただけでも良かったし早くこの場を離れよう。マスキュラーはウオーター
ホースが倒した事にもらおう)」

「『そうだね。この場にいたらあの脳筋野郎と金と名声だけのヒーローが来るかもしれないしね』」

ウォーターホース夫妻が出久の元へ駆けつけて来たが出久は紙に何かを書いた後その場に置いて翼を展開して黙ってその場を飛び去った。

「行ってしまったのか…せめてお礼を言いたかったよ」

「貴方…これを見て」

「どうした…何々？」「マスキュラーは貴方達が倒した事にして下さい」か」

「どうするの？」

「彼の願い通りにしよう」

「そうね」

ウォーターホースは出久が飛び去った空を警察が来るまで見上げていた

雄英入試く入学編

第4話雄英入試試験

「やっぱり高校には行かないとな」

「どの高校にするの？」

「雄英高校」

「え？あの脳筋ヒーローがいる場所だけど」

「あれでも目指していた憧れだからな」

「出久らしいね」

そして雄英高校入試日

「此処が雄英高校か…」

「でかいね」

「[かなりの最難高校だからな]」

出久とキユウベえはテレパシーで話していた

「時間もないし行くか」

出久は校舎内へ入った

筆記試験は問題なく終わり出久は説明会がある講堂へ向かった

「今日は俺のライヴにようこそー!!? エヴィバデイセイハイー!」

ーシーン……ー

まあ、そうなるだろうな。

「こいつあしヴィー!!? 受験生のリスナー! 実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ

! アーユーレディー!!? イエー……!!?」

ーシーンー

とうとう自分でやり出したか……プレゼントマイク……あんたはプロだ……あ、涙目になりながら説明を再開したぞ

「入試要項通り! リスナーにはこの後! 10分間の模擬市街地演習を行ってもらうぜ! 持ち込みは自由! プレゼン後は各自指定の演習会場に向かってくれよな! 演習場には仮想ヴィランを三・種・多・数配置してありそれぞれ攻略難易度に応じてポイントを設定がある! 各々なりの“個性”で“仮想ヴィラン”を戦・闘・不・能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ! もちろん、他人への攻撃等アンチヒーローな行為はご法度だぜ!!?」

なるほど、ポイント制なのか……

そう考えていると一人の男子生徒が手を挙げる。

「質問よろしいでしょうか!?? プリントには四・種・の敵が記載されています! 誤載であれば日本最高峰の恥ずべき事態です! 我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求め、この場に座しているのです!」

「声がかいねあの眼鏡」

「普通に質問しろよ煩い」

「受験番号7111くん。ナイスなお便りサンキューな! 四種目の敵はOP! そいつはいわばお邪魔虫だ! 各会場に一体所狭しと大暴れするギミックよ! マ○オ○ラザ○やった事あるか? あれに出てくる敵キャラ○ツス○だ! 戦わず逃げることをおすすめするぜ!」

逃げることをおすすめ……つまり倒してもいいってことなのか?

「俺からは以上だ!!? 最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう。」

かの英雄ナポレオン||ポナパルトは言った! 『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者』と!」

―更に向こうへ! “Plus Ultra!!” それではよい受難を!!?―

「会場は…:Aか」

「あの喧しい眼鏡と同じ会場じやなきやいいね」

「同感だ」さて、行くか」

出久は実技試験会場へバスで向かった

第5話雄英実技試験開始!! ?

実技試験会場

「ここが実技試験会場? まるで市街地だね」

「見事に再現されてるな」

実技試験会場に着いた出久はいつでも走り出せるように身構えていた

『はい、スタート!! ?』

合図があつた瞬間出久は戸惑う受験生達を置いて走り出した

『『『『標的ハツケン! 排除スル』』』』』

「いきなりかよ! だけどな」

カチッ

ドガガガガガン!! ?

カチッ

ドガアアアアアアアン!! ?

「俺には無意味だったな」

「流石だね出久」

「同意するぜ。雄英は何やってんだよ」

『ムッツプス!!?』

「滑舌悪!!?」

「確かにな…調子悪いんじゃないのか?」

『ハ…イ…ジヨ…ス…ル』

「この仮装敵は機能停止しかけてるよ!!?」

「点検するの忘れたんだな」

『(目標を) ハイジヨスル』

「何を!!? つてか言葉が足りないから怖いよ!!?」

「鬼滅ネタが入ってるな…言葉が足りないあの人みたいだ」

出久とキユウベえは様々な仮装敵にツツコミながら倒して行った

「だいぶ倒したね出久。今何ポイント?」

「数えてないけど多分90は稼いだかな? 此処からは手助けに専念しよう」

「それが良いと思うよ」

これ以上仮装敵を倒す訳にもいかなないので他の受験生の手助けに行こうとしたその時だった

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!?

「なんだあの馬鹿でかいのは!!?あれが説明にあった”お邪魔虫の0ポイント”か!!」

「デカ過ぎない!??!」

巨大な仮装敵…いわゆるお邪魔虫の0ポイントが現れた

「あれがお邪魔虫の0ポイント!??!」

「いくらなんでもデカすぎだろ!??!」

「逃げろ!あんなの勝てるわけ無い!!?!」

他の受験生達は次々と逃げて行った

「全く…あいつらは本当にヒーローを目指して受験に来たのか?」

「呆れるね…どうするの?」

「やるしかないよ。俺は母さんに誓ったんだ…”ヒーローになる”ってね」

「サポートは任せて出久」

「頼りにしてるぜ相棒」

逃げ出している受験生達とは逆に出久は走り出した

「(ドラゴンモード…リオレウス!!?!)」

ギャオオオオオオオオオオ!!?!

出久はドラゴンモードリオレウスに変身した

「……ド、ドラゴンだあああああああああ!?」「……」

受験生達は突然現れたドラゴンに驚いていた

「(くらいやがれええええええ!!?)」

ドガアアアアアアアアアアア!!?

ドガアアアアアアアアアアア!!?

リオレウス(出久)は火球を巨大仮装0ポイント敵に放った

『キカネエナア』

「(頑丈だね)」

「(ならこれで行くか…ライゼクス!!?)」

出久はリオレウスからライゼクスに変身した

「……」「また姿が変わったあああああああ!?」「……」

「(雷鳴衝撃波!!?)」

ドオオオオオオオオオ!!?

バリバリバリバリ!!?

『目標ヲ…ハイ…ジョ…ス…ル』

黒煙を上げながらもまだ仮装敵は機能停止しなかった

「(だいたい限界みたいだね。出久決めちゃって!!?)」

出久は元の姿に戻り大量の銃を召喚した

「これで終わりだああああああああああ!!?」

ドゴオオオオオオオオオオオオオン!!?

巨大仮装0ポインタ敵は跡形もなく消し飛んだ

『終了—————!!?』

「ふう…疲れたな」

「お疲れ出久」

試験は終わった

第6話雄英入学!そしてもう1人の幼馴染

? side

私には幼馴染がいる名前は緑谷出久と言ってヒーローが大好きな幼馴染で私と一緒に遊んだりヒーローを目指していた。だけど出久は無個性である爆破野郎に虐められていたので私がいつも返り討ちにして出久を守っていた。だけどもある日出久の家が火事になり出久のお母さん引子さんは焼け死んでしまっただけで出久も姿を消してしまっただ。そして出久は私が初恋の相手でもあったんだ

「出久は必ず生きています…雄英に行けば必ず会える!」

あ、自己紹介が遅れたね私は佐倉杏子。個性槍を持つヒーロー志望の少女だよ

? side out

「やっぱりでかいな雄英高校は…」

「最難高校だからねえ」

俺は無事に雄英へ合格した。ヴィラン p95、レスキュー p60 p合計155pの一位首席合格だったがあの元幼馴染と偽善者ヒーローがいるヒーロー科には行きたくなかったたのでヒーロー科を辞退して普通科に入った

「教室を探すか」

「案内表をみたら2階にあるみたいだよ」

「サンキューなキューウベえ」

「ヒーロー科に”佐倉”って名前があったよ」

「そうか… あいつ”も入学したんだな」

” あいつ”？」

「もう1人の幼馴染だ。彼奴だけは本当の幼馴染だけだな」

「そうなんだ」

キューウベえとそんな話をしながら出久は普通科の教室へ向かった

「扉…でかいね」

「様々な個性持ちに対応してるんだろうな。バリアフリーみたいだけど」

ガラガラ

「おはよう」

「おはよう。お前ってヒーロー科に落ちたのか？」

「ヒーロー科には合格したが嫌いな奴がいる所には行きたくなかったから普通科にして

もらったんだ」

「そうなのか…俺は心操人使。よろしく」

「俺は緑谷出久。よろしくな心操」

「気になったんだがお前の個性ってなんだ?」

「俺の個性はドラゴンと魔法だ」

「強そうな個性だな。俺の個性は洗脳:ヴィラン向きの個性みたいだけだな」

「そんな事はないぞ。ヴィランの白白に使えたり人質を無傷で保護も可能だしヴィランをあつさりと捕まえられるからヒーロー向きの個性だよ」

「ありがとうな。そんな事言ってくれたのはお前が初めてだ」

「僕を忘れないでよ出久」

「悪いなキュウベえ」

「緑谷:此奴は?」

「俺の相棒だ」

「僕はキュウベえだよ。よろしくね心操君」

「よろしくなキュウベえ」

「イエヤアアアアアアア!!?元気が皆!!?俺が普通科担任だぜよろしくな!」

「プレゼントマイクが普通科担任か」

「そうみたいだな」

「入学式があるから廊下に集まってくれ!体育館まで案内するぜ」

「入学式か…楽しみだな」

俺と心操は体育館に向かった。途中ヒーロー科の教室を見たが誰も居なかった

そして

「あれ？ヒーロー科はどうしたんだYO」

「確かヒーロー科A組はイレイザーだったよな」

「まさか彼奴また勝手に個性把握テストをさせてるのか」

「A組が居なかったのはそのせいなのか」

「相澤君は説教と減給なのさ！」

入学式は無事に終わったが後日相澤は入学式に参加させずに勝手に個性把握テストをさせたので根津校長から説教+減給をされたとき

第7話特別参加!? ? 戦闘訓練!! ?

雄英に入学してから出久と心操はのんびりと過ごしていたまあ授業は普通だったが
：お昼はランチラツシユの美味しい昼ご飯を食べた。俺はミートパスタをチョイスし
心操はカツカレーを食べた。

そして午後からは通常通りの授業に行こうとしたら

「み、緑谷少年!」

「なんの用だ? オールマイト」

オールマイトに呼び止められた

「ヒーロー科の人数が足りないから私の授業に参加してくれないか?」

「ヒーロー科って何人居るんですか?」

「19人だよ…相澤君が1人除籍にしちゃったからね」

「成る程…はあ、分かりました。授業に参加します」

「済まないね」

俺は午後からヒーロー科の授業に参加すると心操に伝えてジャージに着替えてから
ヒーロー基礎学の授業があるグラウンドβへ向かった

グラウンドβ

「私の授業はヒーロー基礎学！戦闘訓練をするぞ。今日は特別参加として普通科の生徒が授業を一緒にするぞ」

「普通科の緑谷出久だ。よろしく」

「なんでお前がいるんだクソデク!!？」

「合格したからだ。文句あるかバカ豪君？」

「な!?!？」

「もしかして…出久？」

「佐倉か…久しぶりだな」

「昔みたいに杏子ちゃんって呼ばないんだね」

「皆の前だからな」

「先生！ここは試験の演習場ですが、今回も市街地演習を行うのですか？」

「いや、2歩先を進む！真の賢しいヴィランは闇に潜む…という事で！これから、ヒーローチームとヴィランチームに別れてもらって2対2の実践訓練を行う！」

「基礎訓練も無しに？」

「その基礎を知るための訓練さ！ただし今回はぶつ壊せばOKのロボじゃないのがミソ
キョー！」

「勝敗のシステムはどうなります?」

「ぶっ飛ばしてもいいんすか?」

「また、相澤先生みたいに除籍処分とかあるんですか…?」

「チームとはどのように別けるのでしょうか?」

「このマントやばくない?」

「くうう…聖徳太子い…?!?」

質問が多いなか一人だけ全く違う事を言っていた。

「えーつと…」

おもむろに懐から何かを取り出し…

「(カンペかよ)」

「いいかい? 状況設定はこうだ! ヴィランチームが核を所有、これをヒーローチームが

解体するという設定だ!」

「(設定がアメリカンだな!!?)()()」

「ヴィランチームはこれを時間制限まで守るか、ヒーローを拘束することで勝利! ヒー

ローチームはヴィランを捕まえるか、ビルのどこかにある核を触ることで勝利だ! コン

ビ及び対戦相手はくじだ!」

「適当なのですか?!?」

「落ち着け。プロは他事務所と急造チームを作るというから、それじゃなんじゃないか？」

「なるほど…先を見据えた計らい！失礼いたしました！」
そしてくじを引いた結果は？

ヒーローチーム

緑谷出久& a m p ; 佐倉杏子

ヴィランチーム

爆豪& a m p ; 飯田

「縁が合うね出久」

「そうだな」

「対戦相手は爆豪だけど大丈夫？」

「大丈夫だ。お前には話してなかったが個性が発現したんだ」

「それって本当？」

「本当だ。見せるのは戦闘訓練が始まってからにしよう」

「そうだね」

第8話 「力の差を思い知らせてやるよ」出久対爆豪!!？

爆豪と飯田は準備の為にビル内へ入って出久と杏子は作戦会議をしていた

「あの爆破野郎は俺が引きつけるから佐倉は飯田を相手してくれるか？」

「任せて」

『準備はいいか？2人共』

「はい」

「準備完了です」

「それでは訓練スタートだ!!？」

出久と杏子はビル内へ入った

「この辺りは大丈夫そうだね」

「あの爆破野郎の事だ：警戒はしないとな」

「そうだね」

「キユウべえ頼んでいいか？」

「任せてよ出久」

「出久…この生き物は何？」

「キュウベえだ。俺の相棒でもあるけどな」

「僕はキュウベえ！よろしくね佐倉さん」

「杏子でいいぞキュウベえ。よろしくな」

「それじゃあそう呼ぶね杏子さん」

「探索は任せたよ」

「任せて」

キュウベえは姿を消して探索へ向かった

暫くして

「戻ったよ！」

「どうだった？」

「眼鏡は3階で核を守っていて爆破野郎は単独行動で真っ直ぐこっちに来ていたよ」

「そう時間は掛からないか…佐倉今のうちに核の回収へ」

「大丈夫なの？」

「心配すんな俺は彼奴よりは強い。負けるわけは無いからな」

「分かった。信じてるからね」

「キュウベえ。佐倉と一緒に着いて行ってくれ」

爆豪の発現に出久と佐倉は呆れていた

ちなみに爆豪は飯田との通信を強制的に切っている

「ぶっ殺す!!?」

「先に行け!佐倉」

「任せたよ出久!」

佐倉は核の回収へ向かった

モニタールーム

「爆豪奇襲なんて男らしくねえ!!?」

「奇襲も戦術の一つだよ」

「すげえ緑谷の奴爆豪の攻撃を避けたぜ!!?」

モニターには出久が佐倉を抱えて避ける姿が映し出された

「ちくしょう!何お姫様抱っこしてるんだ緑谷の奴爆発s」「ペチン」ぶべら!!?」

「五月蠅いわよ峰田ちゃん」

何か言おうとした峰田だが梅雨により制裁された

『避けんなや!』

『普通は避けるだろ?お前ヴィラン相手にそれを言う気か?』

『バカなの?あんだ』

「オールマイト先生…音声は聞こえますか?」

「あれ!? おかしいな…音声は消した筈なのに」

オールマイトが音声をOFFにしても音声は聞こえていたのだ

『ぶつ殺す!!?』

『先に行け! 佐倉』

『任せたよ出久!』

「い、今爆豪なんて言った?」

「確か”ぶつ殺す”って言ったよね?」

「何かあれば止めればいいさ」

「てめえ! 個性があるって事俺を騙したのか!?」

「なんでお前に言わなきゃならないんだよ? 散々俺を虐めて自殺示唆発言した犯罪者さん?」

「な!??」

「言つとくが俺はお前より強い。力の差を思い知らせてやるよ」

その頃佐倉は飯田がいる部屋の前に着いていた

「(核の真前に陣取ってるな)」

「爆豪の奴…やりやがった」

「先生！緑谷君達は無事なの!!？」

「別のモニターを見てみよう」

別のモニターを見るとビルは倒壊してなかった

「ビルが倒壊してない？」

「先生！緑谷君が!!？」

「うっ…ぐああああ!!？」

出久は爆破で負傷していた

『大丈夫か!!？緑谷少年!!？』

「大丈夫ですオールマイト」

『爆豪少年!!？これはやりすぎだ!!？』

「ツチ外したか」

「オールマイト戦闘続行できます」

『そうか。爆豪少年次それを使ったら君達の負けにするからな』

「…分かったよ」

「よくもやってくれたな。反撃させてもらうぜ」

「負傷してるくせに何を言ってるんだよ」

「誰が負傷してるって?」

「な!??」（傷が無いだと!??）」

出久は回復魔法で傷を治していたのだ

「戦闘モード…ライゼクス!!?」

出久は戦闘モードライゼクスに変身した

「二つも持っていたのかよ…」

「二つ持ちで悪いかよ（まあ、魔法は個性じゃないけどな）終わりだ!!? 雷鳴衝撃波!!?」

ドオオオオオオオン!!?」

バリバリバリバリ!!?」

「がああああああ!??」

ドサ

爆豪は気絶した

「弱かったな。確保テープを巻くか」

出久は爆豪が気絶したのを確認すると確保テープで簀巻きにして身動きがとれないようにした。

そして佐倉と合流して出久が飯田を引きつけている間に佐倉が核を回収して出久、佐

倉のヒーローチームが勝利した

第9話出久& a m p ;心操ヒーロー科へ／爆豪の末路

1年A組教室

戦闘訓練の翌日皆はそれぞれ話したりしていたが

ガララッ

「おはよう」

相澤が入ってくると一斉に席に座った

「「「おはよう御座います！」「」」」

「昨日の戦闘訓練の映像観させてもらった。皆よくやったな」

だが

「爆豪お前…何やったのかわかってんのか？」

「ツ!!?」

「お前のやった事は充分除籍にする行為だ…緑谷がビルとビル内に硬化魔法をしていなければ飯田と佐倉、お前は倒壊したビルの下敷きになり死んでいたんだぞ。そしてお前は中学に緑谷を虐めていたらしいな？」

「な、なんでそれを!!?」

「知ってるのかと言いたいのか？あの後緑谷は念の為に保健室に行ったが身体中に”爆破の後や殴られた後の古傷”があつたからな。これは佐倉も知っているんだよな？」

「はい、そいつは10年間も出久を虐めてましたから」

「そして緑谷からきいたが爆豪…お前自殺示唆したらしいな？」

「な!!？」

「確か緑谷にこう言ったらしいな”来世は個性が宿ると信じて屋上からのワンチャンダ
イブ”」

ザワ

「マジかよ爆豪…」

「信じられない」

「よくヒーロー科へ入れたな」

「最低…」

「爆豪お前は除籍だ。荷物をまとめてここから直ぐに出て行け!!？親御さんには連絡してあるからな」

そして爆豪は荷物をまとめて教室から出て行った

「さて、ヒーロー科1年A組は18人になってしまったが流石に合理的じゃない。このヒーロー科に入って来るのが2人いる」

「誰なんですか？先生!!？」

「1人はお前らが知っている人物でもう1人はそいつの友人だ。入ってくれ」

「普通科から来た緑谷出久だ個性はドラゴンと魔法。よろしくな」

「普通科から来た心操人使だ。個性は洗脳。よろしく」

「「「ええー！ー！ー！？」」」」

そして休憩時間

「また会ったな皆」

「緑谷君怪我は大丈夫なのか？」

「まあな。回復魔法があったからなんとかなったぜ」

「でもなんでヒーロー科に来たんだ？」

「担任のプレゼントマイクに言われたんだ。ヒーロー科へ行かないかってな」

「普通科のクラスの皆は大喜びしていたよ」

「良かったな」

「あの爆破太郎は除籍にされたのか？」

「爆豪は相澤先生に除籍されたよ」

「自業自得だけだな」

「緑谷は知っていたのか？」

「ついさつき相澤先生に教えてもらったよ」

「まあこれからよろしくな緑谷に心操！」

「ああ」

「よろしくな」

こうして爆豪は除籍にされ出久、心操がヒーロー科へ入ったのだった。そして爆豪は雄英を去った後家に帰宅後母光己さんに拳骨＋説教されその晩行方不明となった

第10話委員長決めとマスコミ騒動

何処かのバー

「なあ、これみてみな」

パサツ

新聞にはオールマイトが教師になった事が載っていた。

「私はこの体で動けないからドクターが作った脳無を使いなさい。」

「どうなるかなあ？平和の象徴がヴィランに殺されたら」

入学から数週間ごオールマイトが教師になったのはマスコミの中でも大きな騒ぎになった。俺か？久しぶりに佐倉と登校していたら声をかけられたけど殺気で黙らせてやった

「みんなおはよう」

「「「おはよう御座います」」」」

「それはそうと急で悪いんだが君らには……」

その瞬間、クラス全員は抜き打ちテストをするのではないかと思う

「クラス委員長を決めてもらう」

「「「学校つばいのキターー!!?」「」」

すると途端にみんなが手を上げ始める。

「委員長！俺やりたいです!!」

「僕がやる為にあるヤツ☆」

「オイラのマニフェストは膝上

30せ「パキイイイン」

「リーダーやるやる!!」

「私もしたい」

「緑谷何故峰田を凍らせた？」

「変態発言したので反射的にやりました」

「まあ…よくやった」

「静粛にしたまえ!!」

すると飯田が声を荒げる

「多をけん引する責任重大な仕事ぞ!!やりたいものがやれるものではないだう!!周囲か

らの信頼があつてこそその務まる聖務！民主主義に則り、真のリーダーを決めるならここは投票で決めるべきだ!!」

「つて言つてる飯田がそびえ立つてるんじゃねえか!？」

飯田：… やりたいんだな…：

「日も浅いのに信頼もなにもないと思うわよ飯田ちゃん」

「だからこそ複数票を得たものが真にふさわしい人間たということだ!!」

「そんなんみんな自分に入れるぞ!?!？」

「どうでしょうか先生!!」

と飯田君は先生に話を振るが先生は寝袋に入っていた。(寝る気かよ)

「時間内に決まればそれでいい」

そうして急遽投票で決めることに…：

その結果…：

出久3票

八百万2票

となつた

「俺かよ」

「でも緑谷つて結構強いしな」

「ヤオモモも講評の時、すごかったし」

「というわけで、A組委員長は緑谷、副委員長は八百万で決まりな」

「ぼ、僕に一票……」

その時、飯田君は膝をついてOTL状態になっていた。

「俺に委員長が務まるのか？」

「務まるよ」

「お前なら適任だからな」

「俺に票を入れたのはお前らなのかよ」

昼時出久は幼馴染の佐倉、親友の心操と昼食を食べていた時だった

セキユリティーシステム3発動!!?セキユリティーシステム3発動!!?

「なんだ!?!?」

「セキユリティーシステム3って初めてだぞ!!?」

「早く避難を!!?」

「俺達も避難しよう」

「ごった返してスムーズに避難出来ないな」

「出久!外見て!!?」

U S J 襲撃事件編

第11話悪意襲来

マスコミ騒動から数日後

「今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイト、もう一人の三人で見ることになった」
（(なった？ 特例なのか？)）

「はーい。何をするんですか」

「救助訓練だバスで移動するから急げよ？」

バスは市バスタイプだったのでそれぞれ皆は好きな場所に座った

U S J 内

「スツゲー！ U S J かよ!!?」

「ようこそ皆さん！ 嘘の災害や事故ルーム略して U S J へ!!?」

（(本当に U S J だったー!!?)()）

「私の好きな13号だ〜!」

オールマイトは出勤中に事件に巻き込まれ、遅れると電話があったそうだ。

「え〜始める前に話しを一つ、二つ、三つ・・・」

.....
(((ふ、
増えてる！
)))

「……以上!」清聴ありがとうございます!ごさいました!!?」

説明を終えると拍手が響いた。

「ご苦労!3号生徒に説明を」

「(出久!嫌な気配がする!!?)」

「(分かった) 相澤先生嫌な気配がします」

「何故だ緑谷」

「俺の相棒が気配を察知しましたからね」

ズズッ

「来ました先生!!?」

「な!!? 一塊りになって動くな!!? 13号は生徒を守れ!!?」

黒いもやから多くのヴィランが出てきた。

「あれオールマイトはいなんだ〜」

「そのようですね死柄木甲」

黒いモヤの人物は手だらけの男死柄木と話していた。

「まあいいや。じゃあ…」

生徒を殺したら来るのかなあ？」

「(間違いない！マスコミ騒動の主犯はこいつらだ!!?)」

「なんだ？入試みたいにもう始まっているパターンか？」

「動くな切島！奴らからは本物の悪意を感じる!!?」

「よく気づいたな緑谷。奴らは本物の敵(ヴィラン)だ!!?」

「ヴィランンン!!? 雄英に来るなんて馬鹿だろ!!?」

「いや、奴らは馬鹿だがアホじゃねえ…」

「轟と同意見だ。先週マスコミが押し入った時にここのセキュリティを知られてしまったか、その場に奴らがいたんだ！」

「13号先生侵入用センサーは？」

「もちろんありますが・・・」

「13号学校に連絡を！上鳴お前も個性で通信を試せ！」

「は、はい！」

「ツス！」

13号は学校に連絡をし、上鳴は通信を試したがジャミングが発生して通信不可能だった。

「俺は敵を無効化する」

「相澤先生の戦闘スタイルでは無理なんじゃ？」

「一芸だけじゃヒーローはつとまらねえよ任せとけ！」

「相澤先生！」

「なんだ？緑谷」

出久は相澤先生に強化魔法をした

「俺の出来るサポートです。御武運を」

「助かる」

出久に強化魔法をかけてもらった相澤は13号に生徒を託して敵の群れへ向かった。
「射撃隊行くぞ！」

「見た事もないヒーローがいるが正面から来るなんて間抜けだぜ！」

1人の敵が個性を放とうとしたが

「あ、あれ？個性が出ねえ」

敵の個性発動が止まり相澤の捕縛布で捕らえられた

「バカヤロウ！彼奴は見た者の個性を消すイレイザーヘッドだ!!？」

「メディアには出来るだけ出てないのにな」

「消すう？俺達の個性も消せるのか？」

6本腕の敵が殴りかかってきたが

「いや、無理だ」

すかさず捕縛布で捉えて振り回し他のヴィランにぶつけた

「お前らはワンパターンが多いからな。さあ、次だ」

相澤は次々と敵を無力化して行った

「皆さん早く避難を!!？」

「させませんよ？」

「しまった!!??一番厄介な奴が!!??」

加勢に行こうとした相澤だがヴィランに阻まれてしまった

「(くそっ13号頼んだぞ)」

「はじめまして私はヴィラン連合の黒霧と申します。ここに来た理由は平和の象徴オールマイトに息絶えてもらいに来ました」

「(何!??)」

「私達の目的は——————」

「おらあ!」

「くらいやがれ!!?」

バキイ!

ドゴォ!

「その前に俺達にやられるとは思わなかったのか!??」

「切島! 砂藤! 13号が個性を使えない離れる!!?」

「危ない危ない流石はヒーローの金の卵達」

「危ない! どきなさい二人とも!!?」

「貴方達を散らしてなぶり殺す!!?」

黒い霧が出久達を包んだ

「飯田! 後は頼む!!?」

「み、緑谷君!?!」

出久は飯田を霧の外に投げ出した後黒い霧に飲み込まれてしまった

第12話出久VS敵連合

「うわわわ!!?」

ドサ

「イタタタ…此処は何処だ?」

「木があるから森林ゾーンじゃないのかな?」

「居たんだなキュウベえ」

「そりや出久の側に居たからだよ」

「確かにな…居るな」

「ざっと50人は居るよ」

出久の周りには敵達が大量にいた

「肩慣らしには丁度いいな。さて、やるか!!?」

カチツ

ドガァン!!?

カチッ

「な、なんだ!?!?」

「誰かが一瞬でやられたぞ!!?」

「なんの個性だ!?!?」

「まだまだこんなもんじゃないぜ? 戦闘モードライゼクス!!?」

出久は戦闘モードライゼクスに変身した(ライゼクスの鎧を着た姿)

「くらいやがれ! 雷鳴衝撃波!!?」

ドオオオオオオオン

バリバリバリバリ!!?」

「「「ぎやあああああああああああああああ!?!?」「」」」

出久の雷鳴衝撃波でヴィラン達は全員気絶した

「こんなもんか? 敵連合とやらは」

「弱いね」

「他の皆は何処に居るんだ?」

「ここからだ」と山岳ゾーンが近いよ

「とりあえずそこへ向かうか」

出久は山岳ゾーンへ向かった

その頃山岳ゾーンへ飛ばされたのは上鳴、八百万、耳郎はヴィランと戦闘していて八百万が絶縁シートを創造して耳郎、八百万がその中に隠れた後上鳴が全方位の雷を放ちヴィランを全て倒した後上鳴はアホ状態になってしまい地面に隠れていたヴィランに捕まってしまった

「動くな！動いたら此奴の命は無いぞ？」

「やられた！完全に油断していた!!？」

「どうしましょう!!？」

「個性で攻撃したって無駄だからな」

「くっ!!？」

「ウ、ウエーイ」(泣)

その時

カチツ

カチツ

「人質救出つと」

「み、緑谷!!?」

「緑谷さん!!?」

「ウ、ウエイ!!?」

出久が時間停止で上鳴を救出したのだった

「あ！お前いつの間に!!?」

「此奴の相手は任せな」

出久は意識を集中して魔法少年に変身した

「俺が相手だ！覚悟しな？」

「ま、まだ俺には仲間が居るんだよ！こいお前らあ!!?」

――シーン――

「あ、あれ？なんで出てこないんだ!!?」

「あくお前のお仲間なら全員此処へ来る時に倒したぜ」

「な!!?」

「だからお前1人だけなんだよ」

そして出久は時間停止でヴィランをボコボコにした

「助かったよ緑谷」

「あのままでと危なかったです」

「間に合って良かったよ」

その時だった

「ぐああああああああああ!!?」

「な!!?今の悲鳴は!!?」

「あ、相澤先生の悲鳴が中央広場から聞こえてきた!」

耳郎がイヤホンジャックで相澤先生の悲鳴だと判断した

「嫌な予感がするな…俺は加勢に行く!お前らはゲート前に行け」

「まさか一人で行く気!!?」

「無茶です!危険すぎます!!?」

「大丈夫だ。無理だと判断したらその場から離れるから心配すんな」

「分かりましたわ」

「気をつけてね緑谷」

「ああ。ドラゴンモードリオレウス!!?」

出久はドラゴンモードを発動してリオレウスに変身すると相澤の加勢へ向かった

第13話死闘！出久対脳無！！？

その頃相澤は中央広場でヴィランと戦っていたが死柄木により肘を負傷させられ対平和の象徴用に作られた脳無に重傷にさせられてしまった！そして黒霧が生徒に逃げられたと死柄木に報告するとイラついた死柄木は水難ゾーンを脱出した梅雨、峰田、尾白に目をつけ

「生徒一人殺してから帰ろうか」

と言い梅雨の顔を掴もうとしたが

ガシッ！

「俺の仲間に手を出すんじゃないやねえよ」

「なんだお前？」「ゴキイ」ぎやあああああ！！？」

出久は死柄木の腕を折り

「おらあ！！？」

投げ飛ばした

「大丈夫だったか？」

「助かったわ緑谷ちゃん」

「あのままだと蛙水さんが危なかったよ」

「腕を折ったのか?」

「腕を折っただけが問題か?」

「なんでもありません!!?」(大汗)

出久に睨まれた峰田は黙った

「痛ええええええええええ!脳無!!?あの餓鬼を殺せ!!?」

脳無と呼ばれた男が出久に向かって来た

「お前らは相澤先生を連れて逃げる」

「た、戦う気か!!?緑谷!」

「誰か1人時間を稼がないとな。奴は見逃してくれそうにない」

「無理はしないでね緑谷ちゃん!」

「死ぬなよ緑谷!!?」

梅雨、峰田、尾白は気絶している相澤を連れてその場から離れた

「行つたな…:戦闘モードセルレギオス!!?」

出久は戦闘モードセルレギオス(セルレギオスの鎧を着た姿)に変身した

「おらあ!!?」

「魔力解放! 竜人モード…ブラキディオス!!?」

出久は新たな姿竜人モードブラキディオスに変身した

「爆破付きのラツシユをくらいやがれ!!?」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ!!?

ボガアアアアアアアアアア!!?

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ!!?

ボガアアアアアアアアアア!!?

「死柄木! 脳無の再生とシヨック吸収が追いついてません!!?」

「なんでだよ!? 対オールマイト対策だぞ!!?」

「いい加減くたばれ…竜人モードライゼクス!」

竜人モードライゼクスに変身し

「雷鳴衝撃波!!?」

ドオオオオオオオオオ!!?

バリバリバリバリバリバリ!!?

「ドサ

「死柄木! 脳無が機能停止しました!!?」

「そんな…脳無が」

「これでお前の切り札は無い。大人しくしろ」

出久は死柄木達を睨んだ

「(くそつ魔力が殆どないし気絶しそうだ)」

「撤退しますよ死柄木!!？」

「お前を必ず殺してやる!!？」

黒霧がゲートを発生させて死柄木達は逃げ去った

「もう一仕事だ」

出久はゲート前に行き

「相澤先生、13号先生今から治療します」

出久は残っている魔力を全て使い相澤と13号の怪我を治した。そして

「くそつ魔力切れ…か」

ガクッ

「み、緑谷君!!？」

「出久!!？」

ボウン

「ありゃ魔力切れ? 出久」

「そうらしいな」

そこにはキュウベえそつくりの狐?がいた
「い、出久なの?」

「俺だよ。魔力切れのデメリットだけどな」
魔力切れで狐となってしまうた出久だった

雄英体育祭編

第13・5話狐化した出久の日常。そして…

USJにヴィラン連合が襲撃して来て数日が過ぎた。狐化してしまった俺は普通の日常を送ろうと思ったが

「可愛い〜」

「モフモフしてる〜」

「癒される〜」

クラスメイトの女子達にモフられていた

「キュウベえも可愛い〜」

「こつちも癒されるね」

ちなみにキュウベえもモフモフされていた

「なんでこんな事になったんだろ?」

「諦めるキュウベえ…」

「うん、そうだね」

出久とキュウベえは半ば諦めかけていた

「大変だな緑谷」

「他人事だな心操」

「まあな」

「緑谷」(血涙)

「モテやがってえ」(血涙)

変態2人が血涙流しているが無視をしよう

「しっかしどうやって元に戻るんだ？」

「俺にも分からねえな」

「出久は魔力を使い過ぎて魔力切れになったからね」

「じゃあ魔力が戻れば元へ戻るんだな」

「可能性としてはな」

「魔力の回復はどうすんだ？」

「身体に負担をかけないように休む事しかないな」

「そうなのか」

しかし

「おい、いつまでやる気だよ？」

「」「満足するまで!!?」「」

「充分満足してるじゃねえか!!?」

そう言った出久は女子達の腕から抜け出し

「逃げるぞキュウベえ!!?」

「もうこりこりだよ!」

キュウベえと教室から逃走した

「あ!待て〜!!?」

「まだモフリ足りないよ〜」

女子達は出久とキュウベえを追いかけで行った

教室から逃走中の二匹は

「「「まっつて〜!モフモフさせて〜!!?」」「」」

「「「ただけモフモフする気だ!!?」」」

「勘弁してえ〜!!?」

他クラスの女子達に追いかけていた

「この姿はキツ過ぎる!!?」

「疲れてきたあ〜!」

追いかけて回される二匹は疲れ始めていた

「逃げ回ってるから魔力が全く回復しない!!?」

「出久！あそこを見て！！？」

偶然にも窓が空いていた

「その窓から逃げるぞ！！？」

「分かった！！？」

一二匹は空いている窓から外に出て

「ラッキー！茂みだ！！？」

「此処へ隠れよう！！？」

茂みに入り隠れた

「あれ？何処行つた？」

「モフモフちゃん」

しほらへして

「な、なんとか巻いたな…」

「つ、疲れた」

出久とキユウベえは疲れ果てていた

「此処で休むしかないな…」

「魔力は回復した？」

「まだだな…少し寝るから起こしてくれ」

「分かったよ。見張りは任せて」

出久は魔法回復の為眠った

数十分後

「フア〜」

「起きた？出久」

「よく眠れたし魔力も回復した」

「なら元に戻るね」

「そうだな」

ポフィン

「お、元に戻…った？」

第14話 雄英体育祭前

USJ襲撃事件から数日後

「おはよう」

相澤先生が入って来ると皆は一斉に席に着いた。

「ヴィランとの戦いを生き延びてホッと一安心と言ったところだろうが、まだ終わってねえ」

「戦い」

「まさか、またヴィランが!?」

「雄英体育祭が迫ってる」

「「「そつちかよ!?」」」

思わず全員が突っ込んでしまった。

それからは、みんなで体育祭の話題で持ちきりだった。みんなの体育祭に掛ける思いや、麗日のヒーローになるための目的……色々と知れた。負けられないな

「緑谷……その姿はどうした?」

「聞かないで下さい……」(死んだ目)

出久は女子達に着せ替え人形にされ女子の制服を着ていた

「そうか…」

授業も終わりさあ帰ろうとした時教室の前に人だかりができていた。

「出れねえじゃん！」

「相手にしないようにしよう。反対側から出られるぞ」

反対側から出ようとしたがB組の嫌み狸（出久命名）が羨ましいなんだのと言ったが「黙れよ」の嫌み狸が

出久が殺気を出して黙らせ

「俺達は遊びで行ったんじゃないやねえ…一歩間違えれば死んでいたんだぞ！戦線布告？受けてやるよ。今の発言忘れんなよ？」

と物間を睨んだ。出久に睨まれた嫌み狸はB組から来た拳藤に手刀で気絶させられ出久達に

「物間がごめんな…」

と謝った

「お前らが悪いんじゃないから気にすんな」

「ありがとう。体育祭負けないからね」

そして放課後出久は再び女子達の着せ替え人形にされそうになったが

「いい加減にしろおお!!?」

遂にキレて教室から逃走した

「まだ諦めてないんだね…女子達」

「体育祭が近いのに疲弊させないでほしいな」

出久は教室から逃走した後屋上へ逃げていた

「狐化した後元に戻ったと思ったたらこの姿になったからな」

「魔力は回復したのには？」

「そうなんだよな…謎だ」

「魔力を高めたら？」

「やってみるか」

キユウベえに言われて出久は魔力を高めた。すると

ポウン

「元に戻った！」

「やったね出久！」

「ああつて女子制服のまま!!?」

「大丈夫だよ。予備の男子制服持つてるから」

「助かったぜキユウベえ」

男子制服に着替えた出久は教室へ戻った

「出久元に戻ったの？」

「魔力を高めたら元に戻ったよ」

「緑谷の着せ替えが出来なくなるのは残念だよ」

「これ以上は勘弁してくれ：胃が痛くなる」

「大丈夫か？緑谷君」

「胃薬いるか？」

「気持ちだけで感謝するよ」

「体育祭が近いし特訓する？」

「いいねそれ！」

「じゃあ相澤先生にグラウンドβを借りに伝えてくる」

「あ、私も行くよ」

「おう。じゃあ行こうか」

出久と杏子は相澤先生の元へ行きグラウンドβを借りに伝えた
それぞれ特訓しいよいよ雄英体育祭が迫る!!?

とあるバー

「雄英体育祭が迫ってるね」

「先生。これを使っていいか？」

「いいとも甲の好きにきなさい」

死柄木の目線には

「…」

謎の男がいてフードは深くかぶっているので見えなかった

第15話雄英体育祭開幕!

「コスチューム着たかったなあ〜!着用不可なのが残念だよ!」

「しようがないよ、公平を期す為だもの」

と緊張を紛らわす為か、単なる自分の思いを聞いてほしいが為なのか、尾白に大層残念そうな様子で話しかける芦戸の声やら、他にもリラックスする為に会話を交わすクラスメート達の声を耳にしながら、A組の生徒達は控え室にて、それぞれが入場の準備をしていた。

深呼吸やら、柔軟体操やら、控え室の椅子に腰掛けて気持ちを落ち着かせるやら、彼らの行動は十人十色である。

出久は心操とイメージトレーニングをしていた時に轟が話しかけてきた

「緑谷…客観的に見て、お前の方が実力は上だと思う。けど…：…オールマイトに目エかけられてるよね。そこは詮索しねないけど…：…お前にはには勝つぞ」

「…」

「ふ〜ん」

しかし出久とキュウベえは見抜いていた。轟が別の誰かを見ている事を

「おおう、クラスの強者がクラス最強に戦線布告か？」

「おいおい、急に喧嘩腰でどうした!? 直前にやめろって」

轟の行動に上鳴が興味を示し、一触即発とでも言わんかの雰囲気の中で切島が割って入ろうとするものの……「仲良しごっこじゃない」と押しつける

そう言つて去ろうとする轟を出久は引き止める

「お前が戦線布告をするなら受けて立つ……やるからには全力で来い」

『刮目しろ、オーディエンス！ 群がれマスメディアア！ 雄英体育祭1年ステージ、生徒の入場だ！』

生徒達が入場を終えると、薄手のタイツやら、SMマスクやら、手錠やら……露出が多く、まさしく18禁なヒーローコスチュームが特徴であるミッドナイトが登場し、開会式が始まった。

「出久……あの入つて露出狂？」

「（そう見えるのも無理はないけどあれでもヒーローだよ）」

「ミッドナイト……なんちゅー格好をしてるんだ」

「あんな人が雄英の教師でいいの？」

「いい!!?」

「喜んでいる変態がいるね」

「何故こいつはヒーロー志望なのか知りたいぜ」

峰田は喜んでいるが出久、姿を消しているキュウベえはそんな峰田にドン引きしていた

「静かにしなさい!選手宣言緑谷出久!!?」

「はい」

壇上にあるマイクの前に出久は立ち

「宣誓!我々、選手一同は!ヒーローシッブに則り!日頃の鍛練の成果を存分に発揮し

!正々堂々と戦い抜くことを誓います!!?」

ごく普通の選手宣誓を行った。

「宣言ありがとうね出久君!第一種目、所謂いわゆる予選!毎年ここで、多くの者が涙を飲むわ!運命の第一種目は……障害物競走よ!!?」

会場の興奮が冷めぬ中、生徒達はモニターに表示された障害物競走の文字に目を向けた。

「さあさあ位置につきまくりなさい!」

「位置について!」

ミッドナイトの声が聞こえ、その時が迫る。

……また一つ、ランプに光が灯る。

「よーい……！」

そして、残り一つのランプにも光が灯り……

「スタート！」

ミッドナイトが鞭を振り下ろすと同時に障害物競走が幕を開けた。

第16話障害物競走開始!! ?

スタートの合図が鳴った瞬間

「悪いな…先に行かせてもらおう!!?」

パキイイイイイイイイイイイイイイイイ!!?

轟が個性を使い後ろにいる生徒達を足止めしたが

「そう来ると思ってたよ!!?」

「甘いです! 轟さん!!?」

轟の個性を知ってる出久やA組は素早く避けた

「戦闘モード…リオレウス!!?」

出久は戦闘モードリオレウスに変身し

「火炎爪!!?」

ズバン!!?」

後ろにいる足が凍っている生徒達の氷を炎を纏った爪で溶かした

「助けるのはここまでだ! きて、行くとするか!!?」

『最初の障害物は口ボ・インフェルノ!!?』

ズウウウウン!!?」

『目標補足…ハイジヨスル』

「あれってヒーロー科の試験に出てきた0ポイント敵!!?」

「ヒーロー科はあんなのと戦っていたのか!!?」

「こんなのなんともねえ…クソ親父が見てるからな」

轟が素早く個性を発動し、インフェルノ・ロボを凍らせた。

「今だ!凍った隙にロボの足元を通れ!!?」

「やめとけ…不安定な時に凍らせたから崩れるぞ。」

轟の言う通りインフェルノは倒れてきたが

ドガアアアアアアアン!!?

「戦闘モード…ブラギディオス!間に合つみたいだな」

戦闘モードブラギディオスに変身した出久がインフェルノを破壊したのだ

『緑谷!再び人助けをしたぞ!!?』

「サンキュー!緑谷!!?」

「助かったぜ!」

切島とB組の鉄哲が出久にお礼を言った

「次は油断なんかするなよ?ただ被りコンビ」

「ただ被り言うなあ!!?」

『次の障害物は落ちないように気よつけろ!それができなけりやはいずりな!ザ・フオール!!?』

「俺なら問題ないな」

翼を展開した出久は難なくクリアした

「流石出久だね!私も負けられない!!?」

『緑谷は飛んでクリアしたが佐倉は綱を走ってるぞ!!?』

「流石2人だ!僕も負けられないな!」

そう言った飯田だが…

「「「かつこ悪い!!!?」」」

両腕をTの字にしてバランスよく渡っていたのでかなりかつこ悪かった

『最後は地雷地獄怒りのアFGガンだああああ!!?』

轟は地雷を踏まないように慎重に進んでいた

「轟は先に進んでいたか…試しに空を飛んでみるか」

翼を出した出久は飛び上がったが

ドオン!

「危な!!?ゴム弾か?」

ゴム弾が発射され出久は咄嗟に避けた

『言つとくが空を飛んだら自動で撃墜するゴム弾が大砲から発射されるぞ!!?』

「厄介だな…あの姿を試してみるかドラゴンモード…」

ビュン!!?

出久はとあるドラゴンモードに変身して一気に駆け抜けた

『な、なんと緑谷あつという間にゴールしたぞおおお!!?何があつた!!?』

出久は一位でゴールしたのだった

第17話狙われまくりの騎馬戦!音速のモンスター登場

「さあ!!? 次の競技は騎馬戦よ! 予選で落ちた人もいるけれどまだまだアピールのチャンスはあるからね!!?」

「騎馬戦か…」

「苦手な競技だよ」

「上位に成る程狙われるわよ!!? 順位が高ければ高いほど狙われるわよ! 例えば46位の人は6ptよ!」

「(なら俺は1000ぐらいか?)」

「一位の緑谷君は1千万!!?」

全員が獣のような殺気の眼で出久を見たが

「(このくらしいの殺気なら平気だね)」

殺気を浴びても出久は無反応だった

「10分以内に騎馬の相手を見つけてね!」

「じ、10分!!?」

「短すぎだろ!!?」

次々と他の人達は騎馬を見つけているが出久は一千万を持っているので誰も近寄らなかつたが

「出久組んでくれる?」

「俺も良いか?」

幼馴染の佐倉と心操が声をかけてきたのだ

「狙われるが大丈夫なのか?」

「何言つてんの? 幼馴染でしょ」

「俺はお前に自信をつけさせた事に感謝してるからな」

「サンキューな」

「あと一人はどうすんだ?」

「心当たりがあるから任せろ」

—————

—————

—————

「佐倉!」

「うん!」

「心操!」

「おう」

「常闇!」

「ああ!」

「よろしくな」

「騎馬は組終わった?それではカウントダウンをするわよ!」

3!

「狙いは!」

2!

「一千万!」

1!

「騎馬戦スタートよ!!?」

「一千万寄越せく!!?」

「緑谷君一千万いったたくよ」

「追われしの定め!どうする?緑谷!」

「勿論逃げの一択だ!」

出久は背中から翼を出して飛び上がった

「逃すか！」

耳郎がイヤホンジャックを伸ばしたが

「ダークシャドウ！」

「アイヨ！」

バシン！

ダークシャドウがイヤホンジャックを弾き飛ばした

「ナイスだ常闇！」

「選んだのはお前だ」

「(出久！下に紫のボールみたいなのがあるよ)」

「(葡萄頭のモギモギだな) 違う場所に降りるぞ」

出久はモギモギがある場所とは違う場所に降りた

「君の個性頂k 「雷鳴！」アバババ!!？」

物真似狸が俺の個性をコピーしようとしたが雷鳴で痺れさせ

「もらっていくね〜♪」

姿を消したキュウベえがポイントを奪った

「そろそろ来ると思ったよ…轟君」

「一千万貫うぞ」

『緑谷チーム一千万奪取されたと思いきや轟が作り出した氷のドームの中を10分間も逃げ続けているぞ!』

「皆俺はこの後使えなくなる!捕つてくれよ!!?轟君!トルクオーバーレシプロバースト!!?」

「ならこの姿だ!ドラゴンモード…ナルガクルガ!!?」

出久は高速のモンスターナルガクルガに変身した

ギョーン!!?

「何処に行った!!?」

「此処だよ」

「な!!?」

「いつの間に!!?」

出久達は轟の横を飯田より速い速度で移動して離れた場所にいた

「ついでに数ポイント頂いたよ」

「取り返すぞ飯田!!?もう一度だ!!?」

「無理だ!オーバーヒートしてる!」

轟はもう一度奪おうと接近してきた緑谷に

ボオオ

「(なんで今炎を使おうとした!!?)」

無意識に炎を使おうとしたのだ

『カウントダウンするぜ! 3! 2! 1! タイムアップ!!? 順位を発表するぜ! 4位なんとかポイントをここまで取った物間チーム! 3位切島チーム!!? 2位轟チーム! 一千万を死守した緑谷チーム!!? 以上のチームが最終競技に進出だああ!!?』

「緑谷…少し良いか?」

「なんだ? 轟」

「この後どうなることやら」

第18話オリエンテーション

お昼時出久は轟に呼び出され人気ひとけの無い通路へ来ていた

「話してなんだよ轟。佐倉と昼飯を食べる約束してるんだが？」

「済まねえ直ぐに話は終わる」

轟は直ぐに終わると言い話を始めた

「圧倒された使わないと決めたのを使っちゃった」

「話が見えないんだが？」

「お前オールマイトの隠s「ドゴオ」」

「ふざけてんのかてめえ…あの偽善者のなんだって？」ゴゴゴ

轟は出久がオールマイト隠し子と言おうとしたが出久は壁を殴り黙らせた

ビシッ

「…す、すまねえ」(汗)

壁にビビが入っていたので轟は慌てて謝った

「個性婚って知ってるか？」

「確か数年前にあったと聞いたな」

轟は話を始めた個性婚によって産まれた故に幼少期からの父による虐待とも呼べる英才教育、壊れてしまった母。憎き父親への憎悪だと話した

「だから俺は母さんの個性だけでヒーローを目指すんだ」

「そうか…」

「話は終わりだ。時間をとって貰って悪いな」

轟はそう話すと去って行った

「右だけでヒーロー目指すか…全力を出させてやる」

出久も佐倉を待たせてるので昼飯を食べに食堂へ向かった

昼飯も食べ終えた出久は観戦席に座った後ふと気付いたA組女子が居ない事に

「何処行ったんだ？」

すると

『どーした!?? A組女子!!?』

『何やってんだ彼奴ら?』

何故か「死んだ目でチアガールの格好をしたA組女子達」の姿だった

「上鳴さん峰田さん騙しましたわね!??」

「馬鹿だろ彼奴ら」(怒)

「ウエーイ」

「佐倉…状況を説明してくれるか？」

出久は自分の上着を佐倉に着せながら聞いた

「アホ面（上鳴）と変態葡萄（峰田）が相澤先生から女子はチアガールで応援すると言って八百万を騙してチアガールの衣装を創造させたんだ」（恥ずかしくて半泣き）

「成る程な…お前らは着替えて戻つとけ奴らは俺がお☆は☆な☆しをするからな」

「み、緑谷君なんか変だよ？」

「発言がちよつと変だよ…」

「そうか？ お☆は☆な☆しをするだけだ」

「……（（気のせいじゃなかった!!?））……」

出久はお☆は☆な☆し…ではなくお仕置きをする為に未だに喜んでいる上鳴^{変態}と峰田^人の元へ向かった。そして数分後

「ぎやああああああああああああ!!?」

上鳴^{変態}と峰田^人の断末魔が聞こえクラスメイト達は何かあったと思ったが自業自得だと思つたのだつた。その2人は簀巻きにされ「俺達は女子達にチアガールの格好をさせた変態です」のプレートを首からぶら下げられ相澤先生の元へ運ばれていた